

板減少を認め当科にコンサルト。HITと診断し、即座にヘパリンを中止し、同日よりアルガトロバンによる抗凝固療法を開始。新規の血栓症の合併なくワーファリンの内服に移行し退院した。【症例2】60歳、男性。食道癌の手術目的にて当院第一外科に入院。第8病日に食道全摘術、胃管再建、3領域リンパ節郭清を施行。術後血栓症予防のため第12病日よりヘパリン投与開始。第15病日に急激な血小板減少を認め、当科コンサルト。HITと診断し、即座にヘパリンを中止し、同日よりアルガトロバンによる抗凝固療法を開始した。FDP、D-dimerの上昇が認められ、血栓検索CTを行ったところ、下行大動脈に壁血栓を認めた。同様にアルガトロバンの投与とその後ワーファリンの投与を行い退院となった。【結語】血栓症予防ガイドラインが広く普及し、術後の血栓予防のヘパリンの使用頻度は益々増えていくと思われる。医療従事者はヘパリン使用時の血小板数のモニターを行い、重大な副作用であるHITが生じた際には病態の認識と適切な対処が望まれる。

#### 4. 血栓検出におけるMRI拡散強調画像の有用性の検討

天沼 誠, 岡内 研三, 清水 晶子  
掘底 絵里, 徳江 浩之, 岩宗奈津美  
対馬 義人, 遠藤 啓吾

(群馬大学画像診療部・核医学)

【目的】血栓検出におけるMRI拡散強調画像の有用性の基礎検討。【方法】ボランティアより得た静脈

血を使用した。血液、ヘパリン添加血液、50%希釈血液を採血後30分から30日後までの15pointでMRI撮像を行い、見かけの拡散係数(ADC)の変化を観察した。同時にT2緩和時間、T1強調画像での信号雑音比の推移を観察した。実験は1.5T MRIで行った。【結果】いずれも採血後短時間から著明な拡散の低下がみられた。血液で2時間後、ヘパリン加血液で12時間後よりADCが $0.5 \times 10^{-3} \text{mm}^2/\text{s}$ 以下となり、拡散強調画像で容易に検出可能と考えられた。また、生理食塩水と血液のコントラストはb値とともに増加し、 $b=1000\text{s}/\text{mm}^2$ 程度での撮像が臨床応用上妥当と考えられた。【結語】急性期、亜急性期の血栓検出に対し拡散協調画像が有用であることが示唆された。

#### 〈特別講演〉

座長 竹吉 泉 (群馬大院・医・臓器病態外科学)

心原性脳塞栓症・大動脈原性脳塞栓症の診断と治療

北川 一夫 (大阪大院・医・神経内科学・

脳卒中センター 准教授)